

Title	ルートヴィヒ・ティークのノヴェレ観：ピーダーマイアーに至るノヴェレ観の諸相のもとに
Sub Title	Tiecks Novellenbegriff
Author	和泉, 雅人(Izumi, Masato)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.263(80)- 279(64)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0279

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルートヴィヒ・ティークのノヴェレ観

——ビーターマイアーに至るノヴェレ観の

諸相のもとに

和泉雅人

ビーターマイアー期（1815—1848）の文学現象を特徴づける潮流といえ
ば、まず散文叙事文学の隆盛に指を屈せねばならない。その中でも《ロマ
ーン》、《ノヴェレ》という見出のもとに書かれた散文文学がその発展を誇
示し、就中ビーターマイアー初期においてはノヴェレが「流行ジャンル」
としての地位を獲得したことが認められる。⁽¹⁾ ツーバーはその論文『ビーター
マイアーのドイツ美神年鑑と文芸ポケット本。1815—1848』においてこ
の状況を的確に述べている。「1815年の直後には依然として、メールヒェ
ン及び伝説物語、風景物、小話そして写生文が優勢である。それに続く時
代の文芸ポケット本においては、しかしながらノヴェレ及びレヴェレッテ
に第一位の席が譲り渡される。⁽²⁾ ……ノヴェレはもはや芸術愛好家の小さな
サークルを、その題材の精選と形式の推敲とによって楽しませるものでは
ない。それはむしろ、例えば後期ティークのノヴェレのように、教育的諷
刺的意図においてであれ、又、最も成功を取めたポケット本作家の大部分
がそうであったように、主として娯楽に用いられるためであれ、能う限り
広範囲に活動することを旨としたのである。」⁽³⁾ この傾向は散文小説家の数
にも反映しているといえよう。ナポレオン戦争の終り頃には約100人を数
えるのみであった彼らも、20年代に至って倍増し、更に30年代には約450
人の男性作家と60人の女流作家を構成するに至った。⁽⁴⁾ 又、書籍見本市用カ
タログによれば、1822年において詩と散文との位置が逆転し、それ以後散
文は優勢な地位を保ち続けることになる。⁽⁵⁾ ビーターマイアー時代における

代表的な出版メディアである文芸ポケット本及び美神年鑑を通じて、⁽⁶⁾ 散文小説、就中ノヴェレは読書界に浸透し、ついには「我々の現在の文学にとっては、ノヴェレをその中心点とみなすことがほとんど公理になってしまった。」⁽⁷⁾ と認められ、作家としてのデビューを飾るならまずノヴェレが第一とされるまでになった。⁽⁸⁾ 要するに、ムントの譬喩を借りて言えば、ノヴェレはまさに「ドイツの家畜」⁽⁹⁾ となったのである。

しかしビーダーマイアー時代、とりわけその初期においては、ノヴェレという語は、例えばテオドーア・シュトルムが1881年8月14日付ゴットフリート・ケラー宛書簡の中で呈示したような厳格な規定とは掛離れて、⁽¹⁰⁾ 短篇小说だけを意味するジャンル美学的術語というより、この一般的にドイツの読書界に浸透し始めた名称⁽¹¹⁾ に対する、個人の連想と理解の集積にまずは搦めとられていたといえるだろう。勿論、このノヴェレ・ジャンルの規定に向けて多様な試行錯誤が行なわれたものの、それぞれの個人的見解による緩やかな認識の枠の形成を別にすれば、弁証法的な、他の試みとの内的生産的關係を持ち得ず、従っていずれもビーダーマイアー時代の言わば「カメレオンのように色を変え、理論の鎖に繋ごうとするあらゆる試みを嘲笑う」⁽¹²⁾ ノヴェレ現象に対して決定的規範性を保持することはできなかった。しかし他方、決定的なノヴェレ理論の不在は、ヴィルヘルム・マイアーも述べるごとく、ビーダーマイアー・ノヴェレ文学の活性的状況を示唆するものに他ならない。⁽¹³⁾ この時代において、ノヴェレは未だ生成過程に在る存在であり、その文学的可能性は未知数であったと言っていい。「ノヴェレは決して明瞭に形式化された文学ではなく、報告、会話、小品そして、シュティフターも言ったように、『習作』なのであった。形式は未だ固定されてはいなかったが、しかしまさにそれ故にこそ高度の発展可能性を持ち、その結果として時と共にこの世紀の支配的ジャンルのひとつへと上昇して行った。」⁽¹⁴⁾

このようなビーダーマイアー・ノヴェレ文学に大きな影響を一肯定的否定的の両義において一及ぼしたのがルートヴィヒ・ティークであった。1821年の『絵画』から1840年の『森の孤独』に至るまでの39篇のノヴェレ

をドイツ読書界に次々と送り出した彼は、この創作活動によってドイツ文壇に確固とした地位を築いたのである。ゲルヴィーヌスは次のように述べている。「あの逸脱からのティークの帰還も、彼が何年もの間続いた沈黙の後、20年代に彼のノヴェレをひっさげて登場した時、決定的なものとなった。ティークはこの新しいジャンルによって、彼が昔メールヒェンで行なったのと同様、新時代を拓いたのであった。」⁽¹⁵⁾ノヴェレ文学における彼の地位を高く評価する発言は、この時代において至る処で見られる。彼はドイツ・ノヴェレの「建設者」⁽¹⁶⁾として、「養父」⁽¹⁷⁾として見なされている。通常ティークに批判的態度を示している作家達もノヴェレに関しては彼の営為に対して賞讃を惜しむことはなかった。例えばラウベは言う。「彼はすばらしいノヴェレを書いたが、それらはほとんど、今なお支配的なあのより良い物語形式の典型となったのである。」⁽¹⁸⁾しかしながら一方で彼に対する批判も少くない。それはとりわけ彼が長篇小説に匹敵する量を持つノヴェレを書いたこと、或は、殊に20年代の彼のノヴェレにおいて事件そのものよりも登場人物の会話によって担われる様々な省察の方が圧倒的に大きな位置を占めていることに対する非難である。⁽¹⁹⁾それに加えてノヴェレにおける散文的なものに対するフリードリヒ・シュレーゲルの⁽²⁰⁾非難、彼がノヴェレへと転じたことに対する嘲笑⁽²¹⁾などが見うけられる。これらの非難に対してひとつの解答として書かれたと思われるのが、彼の著作集第11巻序文の末尾において展開されたノヴェレ論である。

ここにおいてまず目を引くのは、現実世界への志向であろう。「新しい時代の全ての身分、全ての状況、その諸条件そして固有性」⁽²³⁾を彼は描こうとする。「われわれの生とその状態との諸条件」⁽²⁴⁾をその詩的对象にすることは、「真の作家、本物の詩人、偉大な芸術家はその時代の息子である。彼の作品の中にその世紀の最上のものが反映している。」⁽²⁵⁾とするティークにとって当然の傾向と言えるだろう。しかし翻ってこの時代のノヴェレ観を検討してみるなら、その現実への志向は一般的なものであることが看取される。ノヴェレはそれがドイツにおいて意識され始めた当初から、現実的世界の申し子としての刻印をその身に受けていた。ノヴェレを最初に文

学形式のひとつとして意識したヴィーラントによれば、ノヴェレは見知らぬ遠い国でも理想郷でもなく、我々の「現実の世界」⁽²⁶⁾にその居を定めることが前提であると規定されている。又、A.W. シュレーゲルは現代的非幻想的ロマンの多くが、ノヴェレと同じものをその目標に据えていると述べている。「即ち、世の中の成り行きについての経験を伝えること、そしてある事柄を現実⁽²⁷⁾に起こったものとして物語る⁽²⁷⁾ことがそれである。」このような機能を持つノヴェレであれば、生の多様性が生み出すあらゆる音調に親しむことが可能だが、しかしそれは「現実の世界」をその住み処としなければならぬ。従ってノヴェレは、「はっきりと特定された場所、時、人物名の挙示を好むのである。」⁽²⁸⁾ピーダーマイアー時代に入ってから、この現実性に対する傾向はますますその度合いを深めて行くこととなった。「その日のすべての町の話題をノヴェレと呼び、金棒引きをノヴェリストと呼んでもさしつかえない。」⁽²⁹⁾この発言からも窺えるように、現実的状况を叙述するというノヴェレへの要請は当然、日常生活において遭遇する人物や体験談、噂話などに作家の目を向けさせる。例えばハウフは次のように自らのノヴェレについて述べている。「私の書いた幾つかのノヴェレは、秘密にされている家族の話や、その本当の原因があまり大衆に知られていない、異常で珍奇な不意の出来事に関するものだ。そして、請けあってもいいが、私はそれらすべての話を、一部はベルリンで、又、一部はハノーファー、カッセル、カールスルーエ、ドレスデンにおいてさえも、まさにそのような老婦人方から、つまり、その周囲の人間のゴシップに通じた人達から聞き、そしてしばしば文字通りそのままに物語ったものであった。」⁽³⁰⁾このように見てくるとティークの現実への志向が時代の文脈に即したものであることが理解される。⁽³¹⁾

一方、現代の生の多様に視線を移したノヴェレは、次にその多様性の中から生起する出来事をその成立要件として要求する。即ち「ノヴェレにおいては何かが起こらなければならない。」⁽³²⁾のである。そこでは第一に事件が語られねばならず、登場人物はいわば事件の構成要素としての地位に退くことになる。多くの批評家、作家は又、その点にロマンとの相違を見

(67)

ようとする。例えばシュライーマハーは次のように説明する。「ここでは(=ノヴェレにおいては)人物の描写は筋の描写に従属させられる。ロマンに目を転ずれば、そこでは事態は逆であろう。…事件は登場人物がその中であって発展するためのものでしかない。⁽³³⁾」ノヴェレにおける出来事のこのような優位性は更に、作品の構造上その出来事或は状況の中心化、又は中心の要求となって現れる。とりわけテオドーア・ムントはジャンル美学的見地から「状況の中心点から必然的に生じる極めて特定の結末がノヴェレに固有のものである。⁽³⁴⁾」と述べているが、他の批評家、作家も若干の相違はあれ、同様の見解を展開している。⁽³⁵⁾ ここにおいてティークの上記序文末尾におけるノヴェレ観に目を向けるならば、所謂その転回点について述べた部分において出来事を中心に据えていることが見てとれる。「ノヴェレは……大小の別なくとにかくひとつの事件を、極めて明るく照らすことによって、他のすべての物語から際立つが、その事件は容易に起こり得て、しかも不可思議な、ひょっとすると、唯一無二であるようなものである。話のこの転回、そこから物語が、意外な、全く逆の、しかも自然に登場人物と状況に適合しつつ、その結果を生起させるこの点は、不可思議でさえすらあるその事柄が、一方事情次第では、また日常的なものであり得るだけに、それだけ一層強く読者の空想に印象づけられるのである。⁽³⁶⁾」この極めて明るく照らし出される転回点は、明らかにA. W. シュレーゲルのそれに依存している。「ノヴェレは決定的な転回点を必要としている。」そしてその結果、「話の主要部分がはっきりと目立つようになる」⁽³⁷⁾。しかし、ティークの独創性は転回点そのものにあるのではなく、それが日常的であると同時に不可思議でもあるという点にある。そしてこの日常性と不可思議という図式は、彼の初期の論文『シェイクスピアにおける不可思議なもの取り扱いについて』において早くも登場している。しかしこの論文においては不可思議はあくまでも外在的に、そして対立的対比的に存在する異質な超自然的世界として把握されており、それは彼の前期の所謂創作メールヒェンにおいても同様である。そこでは日常世界は不可思議界のひきたて役にしか過ぎず、又、両者が互いの領界を侵すことがあってもそ

の場合、日常性と不可思議は各々独立的契機として対立するのである。しかしノヴェレにおいて不可思議は日常性の中であって看取されねばならない。一方、ティークはノヴェレにおいて特徴的な役割を、登場人物たちの対立、争いとその観照及び和解という点に見ているようである。「ノヴェレは時折、その立場に立って、人生の矛盾を解き、運命の気まぐれを説明し、情熱の狂気を嘲笑し、心や人間の愚かさの幾多の謎を精妙な織物の中に織り込み、その結果より明敏となった眼差しがここでもまた、笑いと憂いの中に人間的なるものを、また非難すべきことの中に高い和解の真理を認識するのである。」このノヴェレ⁽³⁸⁾の立場、その眼差しは同時にティークのものである。そして、彼のノヴェレにおいて、しばしば意外な出来事が転回点として現われ、そこにおいて登場人物達の陥っていた葛藤が解決され、対立が和解へと導かれることを考慮に入れるならば、転回点の担う機能は自ずと明らかであろう。葛藤に巻き込まれている人物達は、転回点によって担われた不意の出来事に遭遇し、その本質に引き戻される。嘘言者はその仮面を剥ぎ取られ、熱狂者は冷静になる。言い換えれば彼らの主観性が、その負荷から解放され、再び自らを取り囲む現実性との融和を果たす契機として転回点はひとまず理解される。そして、日常的、現実的なものが不可思議の色合いを帯びるのは、そこにおいて《非日常化》が行なわれるからである。現実界から魔界へと境界を踏み越えるのではなく、あくまでも現実界の中に存在する主体の客体的世界に対する秩序化され、日常化された理解が変容をその身に受ける契機である。その契機に立つ者、或は立ち合う者が不可思議を「一瞬の内に」看取するのである。「あらゆる不可思議の内で最高のものは、悔いる者の、或は冷淡な者の心が抗い難く神へと魅きつけられると感じる時、人間自身の中に生じるのである。というのもここにおいて、今一度創造の過程が起こるからだ。この再生において無から有が生じるのである。」⁽³⁹⁾転回点において担われたこの契機において、主体はそれまでの自己を否定し、より高い主体へと向かうのである。詩人の課題は、この「不可視のものを可視に」する所にある。「ティークはここにおいて、最高のもの、不可視のものをポエジーによって平明

に具象的にしようとする。というのも彼にとってポエジーの課題は、真の感激が、低きものの内にも高きものを、地上的なるもの内に天上的なるものを再認識し、愚か者の目が閉じられている所にも神を見ることにある⁽⁴⁰⁾のだから。」又、ティークは彼が繰り返す「模範」として挙げるセルバンテスについて次のように言う。「この偉大な創始者は、読者と作家達に現実の生を指し示した。そして彼の偉大な天才は、どのようにして日常的な取るに足らぬものが不可思議の輝きと色彩を帯び得るかを示したのである⁽⁴¹⁾。」転回点は、従って、主体が自己否定によって変容しつつ、絶対との関わりにおいて不可思議を看取し、又、客体的世界、現実界との融和を図る契機であるにとらえられよう。

次に、転回点の機能を読者に対する物語技法的側面に限定して検討してみる。先に引用した転回点についての箇所において、ティークは明らかに読み手に与える効果を考慮に入れている。彼によれば、日常的であると同時に不可思議でもあることによって、転回点において担われた事件は、一層読者に強い印象を与えることができるのである。又、更に言う。「そのようにして我々は、実際の生活自体においてもこのようなことを経験するのである。又、われわれの知人が自分の体験からわれわれに語ってくれる事件は、このような仕方、極めて深く、又、長く続く印象を与えるのである⁽⁴²⁾。」このことから推測すると、ティークは読者を社交サークルにおいて自分の朗読に耳を傾ける聴衆と同一視しているように思われる。一方、このようなサークルにおいて最も喜ばれるのは物語であり、その巧みな即興的語り手なのである。「最も自然な娯楽、最も手近な暇つぶしであり、いちばん手頃な楽しみは、昔も今も物語である。集りの中で、準備なしに事件や物語を、上手に、又、興味深く語ってみせることのできる者が、人々から好まれるのだ。人々の目はすべて、彼の口もとに集まる。退屈で憂鬱なサークルは、もしそのような才能を持った者が集りの中へ入ってくれば、息を吹き返し、明るいものとなるのである⁽⁴³⁾。」この即興的な語り手をティークと同一視しようとするのはハイニヒェンだが⁽⁴⁴⁾、一方日常性と不可思議の関係は、日常性＝現実を精確に、細部にわたって叙述することによ

って、日常性が不可思議の色合いを帯びた時、一層その不可思議の魅力が、又、読み手に対する効果が際立つものとなるだろう。「物語においては時と場所が常に想起されねばならぬ。それが古代であったり、遠い国であったりすればなおさらのことだ。状況の細部が緊張を生み、それが人の心を支配する。穏やかに又、精妙に。突然の展開、予見できない偶然、しばしばその始まりと矛盾する人物達、主要な出来事の細部へのつながり、計算不能な偶然によるその解決。これらすべてのものが、物語に魅力と不可思議な性格を与えるのである。」⁽⁴⁵⁾ ここにおいては緊密な劇的構成など期待すべくもなく、素材の間を自由に行き来する即興的態度が見え隠れするだけである。確かに事件は中心的地位を占めているが、それは他の物語部分よりも際だつことで、読み手＝聴衆に印象を「深く又、長く」続くよう与え得るために過ぎない。筋の発展が急激にそこへ向かって進行し、集中化する点ではない。そのような構成上の配慮は全く欠落していると言っている。ごく表面的にみればそこには偶然が存在するだけである。更に、これに加えて芸術談議などが長々と繰り上げられることを考慮すれば、⁽⁴⁶⁾筋発展上の緊密さなどは、一彼のノヴェレにおいて若干の例外は認められるものの（例えば所謂「真のノヴェレ」である『おてんばないギリス娘』）—そもそもティークのノヴェレ観のプログラムには入っていなかったと言える。物語技法上から検討する限り、ここには読者とそれに与える効果に関する配慮が圧倒的に優位を占めていると認められる。⁽⁴⁷⁾

最後に、ティークに対して行なわれる批判の内、最も多いノヴェレとロマンとの混同について検討してみたい。この批判或は非難或いは留保は、とりわけティークの書いたノヴェレの内でも最長の『若き指物師』⁽⁴⁸⁾に対して向けられることが多い。しかしビーダーマイアーの時代状況の中において、彼のノヴェレ観はまずとらえられねばならないだろう。

ビーダーマイアー期におけるロマンとノヴェレの関係については、まず二つの傾向が挙げられねばならない。一方は、ビーダーマイアーの作家・批評家は両者の区別を専らその作品の分量によって行なっていたという⁽⁴⁹⁾ことであり、他方、当時において消し去り難くこのノヴェレという名称

に固着していた概念の曖昧性にもとづいて、短かさという形式的観点を無視して、ある種の内容的観点からそのロマーンとの差異を立てようとする傾向である。この二つの傾向を比較すると、後者に比べやはり前者の方がより強力な共通認識の枠を形式していることがわかる。次のニュースラインの発言がいわば典型的なものであると言えよう。「ノヴェレとは、小さな散文の物語である。即ち、個々の事件、状況等の散文の物語である。」⁽⁴⁹⁾更にはロマーンとノヴェレの間にはその分量による相違しか認められないとする見解も登場する。「良きノヴェレは、小型の良きロマーンなのだ。」⁽⁵⁰⁾「ノヴェレの本質は近代エポス、即ちロマーンのそれと同一である。そしてその短かさだけがノヴェレをロマーンから区別するのだ。」⁽⁵¹⁾しかし勿論、ラインベックが自己批判的に述べているごとく、単に短いロマーンがノヴェレではないという見解も存在したが、彼自身その発言の中で間接的に指摘しているように、少数派に属するものと言えよう。「従って、おそらくノヴェレが、われわれの詩学において普通そうであるように、又、かつては私自身によって行なわれたように、短いロマーンとして見なされるなら、それは誤った見解であることが明らかになるだろう。多くの物語は確かに短いロマーンであるかも知れないが、しかしそうであるとすると、それらの物語はまさにノヴェレではないのである。」⁽⁵²⁾

他方、内容的観点からのみノヴェレを見ようとする立場に即せば、あくまでもその見方に作家がとらわれた場合、短い散文小説がノヴェレ、長いそれがロマーンという外面的形式的相違はその前で消滅することになる。そしてこの内容的観点はノヴェレの現実性への志向という共通認識の枠内において、個々の作家のノヴェレに対する連想、理解に依存するのであり、従って、そこに大きなノヴェレという現象の生じる余地がある。例えばメーリケは彼のいわゆる『ウア・ノルテン』に『二部構成のノヴェレ』と副題をつけたが、その場合ビーダーマイアー的特徴のひとつをなす「つましさ」とメーリケ自身の内気さが直接的原因であるにせよ、その背景には、ティークの指摘しているような、自分の作品が十分な重要性を持たぬ時に、その「口実」としてノヴェレという名称が使用されていた風潮が

存在したのである。⁽⁵⁴⁾ ゼングレは更に次のように述べている。「初期ビーダーマイアー時代においてはロマンとノヴェレとはほとんどお互いに区別されていない。それらの散文としての共通性格の方が……その相違よりも強く感じられている。⁽⁵⁴⁾」一方、ビーダーマイアー・ノヴェレの画期的研究で知られるシュレーダーは概括的な立場で、この傾向を次のように説明する。ビーダーマイアー時代の人間は「この《ノヴェレ》という名前を外面的事実性の（『長い』）描写と風俗描写の指示語と評価するやただちに、分量には何ら明確な制限などもはや加えなかったし、むしろこのジャンルを、現実離れた主観主義的内面性の開陳や、『魂の叙述』或は『恋の謀りごと』といったロマンの持つイメージと対比させたのである。⁽⁵⁵⁾」その結果、一種の不可逆的現象が生じる。『客観的印象』の叙述がノヴェレに特殊なものであると評価される場合においては、『長たらしく述べられたどの物語も』おそらくノヴェレと呼ばれることができたが、分量の面ではより少ない叙述であってもそれが『幻想的な虚構』であれば、ノヴェレとは呼ばれなかった。というのも、『人物や場所の描写』における不自然さが反対に、短い物語にも『ロマンの色合い』を与えたからであった。⁽⁵⁶⁾」従って、ノヴェレの側からこの方向を極端にまで押し進めれば、逆にすべての現実的物語をノヴェレと名付けようとする傾向が、既にリアリズム小説を「ノヴェル」、空想的伝奇的小説を「ロマンス」と呼び、区別していたイギリスを範例として出現したとしても不思議ではない。シュタイネッケはロマンの側から、その原因を分析している。「ますます明瞭となった、ロマンの現実への接近と共に、20年代の論議の中で多様に術語上の問題が現れ出てくる。従来、先に述べたごとく、ロマンは『荒唐無稽な』及び『幻想的な』ものとして通用してきたため、いまやその反対のもの一荒唐無稽でないもの、現実に近接したもの一を誤解されることなく、同一の概念で呼ぶことが困難になってくる。小説家は確かに、その『荒唐無稽でない』ロマンを副題で『アンチ・ロマン』と称することもできるが、しかし批評家や理論家にしてみれば、そのような逃げ道を通ることは勿論できない。」そこで代替用語についての論議が始まったのだが、偶々イギ

リスの先例があったため、ノヴェレという語が登場したのである。⁽⁵⁷⁾ ティークもこの方向に目を向けていることは、彼の二度にわたる発言によって間接的に示されている。⁽⁵⁸⁾ 勿論このような試みはドイツにおいて達成されなかったが、シュタイネッケはその理由として、ノヴェレという代替語自体に様々な先入見が固着している一方、「荒唐無稽なもの」が専ら通俗文学の方へ移行して行った結果、ロマーンに対する誤解の危険性が減少したためであると指摘している。⁽⁵⁹⁾ そして、このような時代の文脈の中にティークの所謂大ノヴェレを置いてみるなら、ビーダーマイアー時代においては何ら特異な現象ではなく、むしろ一般的なものであると言え、その形式美学的批判は、19世紀後半においてほぼその確定をみた擬似規範的ノヴェレ観とそれに連なる批評者達の歴史的状況を無視した批判として理解されよう。それでは『若き指物師』を例にとり、ティークの所謂内容的観点とは何であるかを検討してみたい。

全ての小説をノヴェレと呼ぼうとする傾向の存在したことは、先述のようにティークにおいても認められ、それも又、彼のノヴェレに関する内容的観点の外延を形成する要因のひとつに挙げられよう。他方、この作品に内在する諸特徴自体がむしろ多くを示唆していると思われる。第一の特徴は、ポールハイムも言及しているように、その幾何学的構造であろう。⁽⁶⁰⁾ 全VII. 節から成るこの作品において、I. VII. がレオンハルトの自宅。II. VI. が旅の途上。III. IV. V. が城における劇の上演。更に中心のIV. においてはレオンハルトとシャルロッテの出会いが述べられ、II. とVI. においては各々レオンハルトの初恋物語とそのエピローグが述べられる。従って、IV. を中心としたヒエラルヒーを形成する。つまり、もしポールハイムが掲げている「完結性」⁽⁶¹⁾ がノヴェレの規範的形成要因と仮定されるなら、この作品をノヴェレに所属させることも可能である。しかし、この場合ティークにとってより重要なのは、彼が再三模範的ノヴェリストとしてその名を挙げているポッカチオとの類縁性である。この作品は登場人物が社交の場で語る挿話と、主に芸術的対象を志向する省察の連続であり、そこに多様な恋の進行が絡むのだが、上記の省察もまた登場人物によって語られ、

議論されることによって、一種の一完全とは言えぬものの一枠の存在が間接的に示されていると言える。このような独立的挿話を中に包み込んだノヴェレの例は、ティークにおいては比較的多数を占めるものである。この『若き指物師』においても幾つかの挿話が語られるのだが、その中でもレオンハルトの初恋物語は転回点を備え、外的世界に対する意識、理解の変容をもたらす点でティークのノヴェレ観に近い存在と言える。しかし、枠の存在と言ってもそれはやはり間接的・暗示的なものに過ぎず、あくまでも彼の所謂内容的観点の本質的構成要素というよりは、補助構造にしか過ぎない。そして、この作品においてティークにとってのノヴェレ的本質的構成要素は、やはり、偶然の折重なりによってもたらされる契機による日常の《非日常化》であり、日常性が「不可思議の輝きと色彩を帯びる」ことなのである。事実、この作品中第7節でティークはエルスハイムの姿を借りて次のように述べている。「ねえ君、……これらすべてのことが不思議な物語を作ってやしないだろうか。全く、あとほんの少しの所で幻想的なメールヒェンになる所だ！ しかもその原料の方と来たら、とても日常的なんだから！」このエルスハイムの言葉と、1822年に弟フリードリヒに宛てた手紙の中で、ノヴェレの本質的表徴として言及されている「日常性の中に不可思議なるものを置くこと」という図式を重ね合わせれば、ティークがどのような観点から、この作品をノヴェレと名付けたのか明らかに看取されると言えよう。又、この作品に言及したケブケとの対話において、次のように述べている。「一連の迷誤を彼らは体験しなければならない。そしてそれによって彼らは、真の道徳的立場へと至ることが出来るのである。その迷誤を通じて始めて彼らは、正しい道を知るのである。」レオンハルトそしてエルスハイムが正しい道をそれぞれの立場において、探りあてる為には、迷誤がその前提として必然的なものであり、そのような迷誤に陥った自己を否定し、新たな自己の創造が行なわれねばならない。そしてこれこそ、先述した転回点において担われた変容の過程に他ならない。従って、主にこれら二つの観点からティークはこの作品をノヴェレと呼んだものと言えるであろう。

ティークのノヴェレ観を、その時代相のもとにみる時、それが同時代のノヴェレ観に密接な関係を有する一方、転回点における否定的契機による自己変容と主体・客体の融和、及び絶対との関係における日常の不可思議の受容がティークのノヴェレ観の本質的構成要素として挙げられるだろう。しかしながら、これを作品評価のクリテリウムとして教条化することも又、許されない。ティークのノヴェレ観とその実践との間には、いわば多様な遊戯空間が存在するのであり、彼の作品の中にこれを絶えず捜し求め、その理想型の高みからその作品評価を行なおうとするのは無意味である。ティークの転回点を主にその形式的側面からジャンル美学的カーノンとして絶対化し、普遍的妥当性を与えようとする行為と同様、それは不毛な結果しか生み出さないであろう。

注

- (1) 「どの文学潮流にも」とヨスト・ヘルマントは述べている。「その本質に特に照応するジャンルがある。感傷性の時代には手紙であり、ロマン主義においては断章であったが、ビーダーマイアー時代においてはノヴェレであるかも知れない。」Hermand, Jost: Die Literarische Formenwelt des Biedermeiers. Gießen 1958.

更に、パウル・クルックホーンは「その優遇された物語形式は…ノヴェレであり、これはまさにあの時代の流行ジャンルと呼んでさしつかえない。」と指摘している。Kluckhohn, Paul: Biedermeier als literarische Epochenbezeichnung. DVjs. 13 (1935) S. 1-43. In: Neubuhr, Elfriede: Begriffsbestimmung des literarischen Biedermeier (Wege der Forschung Bd. 318) Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1974. S. 129.

- (2) ハウフもまた、1828年にメーデルヒェン等の散文叙事文学を除くジャンルの後退について言及している。Vgl. Hauff, Wilhelm: Sämtliche Werke Bd. 2. München (Winkler) 1975. S. 334.
- (3) Zuber, Margarete: Die deutschen Musenalmanache und schöngeistigen Taschenbücher des Biedermeier. 1815-1848. In: Archiv für Gesch. d. Buchwesens. Bd. I. Frankfurt a. M. 1958. S. 463.
- (4) Vgl. Schröder, Rolf: Novelle und Novellentheorie in der frühen Biedermeierzeit. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1970. S. 58.
- (5) *ibid.*, S. 59.

- (6) 韻文だけを掲載するのが美神年鑑であり、その外に散文も掲載するのが文芸ポケット本であるという厳格な区別も、ピーダーマイアー時代の後半に至り、消滅することとなったが、それは「若干の美神年鑑が、読者の好みに従って、従来は文芸ポケット本にのみとっておかれた文学ジャンルも同様に引き受けたため」であった。Zuber: *ibid.*, S. 399.
- (7) Rosenkranz, Karl: Ludwig Tieck und die romantische Schule. In: K. R., Studien. I. Theil: Reden und Abhandlungen. Zur Philosophie und Literatur. Berlin: (Jona) 1839. S. 334-337. In: Polheim, K. K. (Hrsg.): Theorie und Kritik der deutschen Novelle von Wieland bis Musil. (Deutsche Texte 13) Tübingen (Max Niemeyer) 1970. S. 56. (以下 Polheim と略す)
- (8) *ibid.*
- (9) Mundt, Theodor: Moderne Lebenswirren. Briefe und Zeitabenteuer eines Salzschreibers. Leipzig (Reichenbach) 1834, S. 155-157. In: Polheim.: *ibid.*, S. 71.
- (10) 『『ノヴェレ』は散文学の中で最も厳格にして完結的な形式であり、ドラマの姉妹なのです。』Storm, Theodor: Brief an Gottfried Keller vom 14. August 1881. In: Der Briefwechsel zwischen Theodor Storm und Gottfried Keller. Hrsg. von A. Köster. 3. Auflage. Berlin (Paetel) 1909. S. 114. In: Polheim.: *ibid.*, S. 120.
- (11) シュレーダーによれば、たいていは中位の長さを持つこの散文物語形式のおよそ1820年以降の圧倒的増大と同時に、ノヴェレという言葉自体がドイツにおいてようやく一般的なものとなり始めた。とは言え、ノヴェレという語の他にもこの散文物語形式を示す名称が数多く存在した。Vgl. Schröder, R: *ibid.*, S. 74 ff.
- (12) Meyer, Wilhelm: Drei Vorlesungen über das Wesen der epischen Poesie und über den Roman und die Novelle insbesondere. In: Bremisches Album. Hrsg. von H. Hülle. Bremen (Heyse) 1839, S. 111-119. In: Polheim.: *ibid.*, S. 79.
- (13) Meyer, W.: *ibid.*, S. 79 f. 更に、アレクシスも1821年に次のように確認している。「批評者 (=アレクシス) の知る限り、今までのところ、未だこの多様な種類のノヴェレと物語についての理論は構成されていない。」しかし、逆にそれによる「最大の自由と多様性がこの極めて様々に異なった形成物 (=ノヴェレ) の開花隆昌を許している。」Alexis, Wilibald: Ernst von Houwald, Der Leuchthurm. Die Heimkehr. Fluch und Segen. Das Bild. Romantische Accorde [Rezension]. In: Hermes oder Kritisches Jahrbuch der Literatur. IV. Stück für das Jahr 1821. Nr. XII. der

- ganzen Folge. Leipzig (Brockhaus) S. 32-34. In: Polheim: *ibid.*, S. 40.
- (14) Sengle, Friedrich: Voraussetzungen und Erscheinungsformen der deutschen Restaurationsliteratur. In: *Arbeiten zur deutschen Literatur 1750-1850*. Stuttgart (Metzler) 1965. S. 140 f.
- (15) Gervinus, Georg Gottfried: *Geschichte der Deutschen Dichtung*. V. Bd. 5. Aufl. Hrsg. von K. Bartsch. Leipzig (Engelmann) 1874, S. 774-776. In: Polheim: *ibid.*, S. 113.
- (16) Rosenkranz, K: *ibid.*
- (17) Feuchtersleben, Ernst Frhr von: *Die Novelle. Didaskalie*. In: E. F. v. F. s *sämtliche Werke*. Hrsg. von F. Hebbel. III. Bd. Wien (Gerold) 1851, S. 44-56. In: Polheim: *ibid.*, S. 108.
- (18) Laube, Heinrich: *Wilhelm Marsano, Die unheimlichen Gäste. Marco Doloroso. Die Abenteuer einer Nacht*. In: *Zeitung für die elegante Welt*. XXXIII. Jg. 1833. Leipzig (Voß) Nr. 108, S. 429 f. In: Polheim: *ibid.*, S. 87.
- (19) Alexis, W.: [Vorwort]. In: *Die Schlacht bei Torgau und der Schatz der Tempelherren. Zwei Novellen*. Berlin (Herbig) 1823, S. VI-IX. In: Polheim: *ibid.*, S. 42.
- (20) 「ポエジーの貧弱なワインが多すぎる程の悟性の水と混ざり合っている。」
Raumer, Friedrich v.: *Lebenserinnerungen und Briefwechsel*. Leipzig. 1861, S. 171. In: Heinichen, Jürgen: *Das späte Novellenwerk Ludwig Tiecks. Eine Untersuchung seiner Erzählweise*. Diss. Hamburg. 1963, S. 40.
- (21) Vgl. Heine, Heinrich: *Die romantische Schule*. In: *Sämtliche Werke*. Hrsg. von Kohut, Adolph. X. Bd. Berlin (Knaur) 1904. S. 168 ff.
- (22) Vgl. Polheim: *ibid.*, S. XV.
- (23) Tieck, Ludwig: *Schriften. Unveränderter photomechanischer Nachdruck der Ausgabe*. Berlin, 1854, Berlin (Walter de Gruyter) 1966. S. LXXXVII.
- (24) Tieck, L.: *ibid.*, S. LXXXVIII.
- (25) Tieck, L: *Kritische Schriften. Photomechanischer Nachdruck*. Berlin (Walter de Gruyter) 1974. II. Bd. S. 378.
- (26) Wieland, Christoph Martin: *Die Novelle ohne Titel. Einleitung*. In: *W. s Gesammelte Schriften. I. Abt. XX. Bd*. Berlin (Weidmann) 1939. S. 60 f. In: Polheim: *ibid.*, S. 2.
- (27) Schlegel, August Wilhelm: *Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst*. III. Teil: *Geschichte der romantischen Literatur*. Hrsg. J.

- Minor. Heilbronn (Henninger) 1884. S. 242-248. In: Polheim: *ibid.*, S. 18 f.
- (28) Schlegel, A. W.: In: Polheim.: *ibid.*, S. 20.
- (29) Rumohr, Carl Friedrich v.: *Novellen*. II. Bd. München (Franz) 1835, S. 1-11, 38-43, 102-104, 237-241. In: Polheim.: *ibid.*, S. 47.
- (30) Hauff, W.: *ibid.*, S. 333 f.
- (31) 「真のドイツの生活の…明確な断面を本当に描いてみたいという願いが私の心の中に生き生きときざした。」 Tieck: *Schriften*. XXVIII. Bd. S. 5.
- (32) Schlegel, A. W.: In: Polheim: *ibid.*, S. 18.
- (33) Schleiermacher, Friedrich: *Ästhetik*. Hrsg. von R. Odebrecht. Berlin u. Leipzig (de Gruyter) 1931, S. 275-278. In: Polheim: *ibid.*, S. 24.
- (34) Mundt, Th.: *Über Nouellenpoesie*. In: Th. M., *Kritische Wälder*. Blätter zur Beurtheilung der Literatur, Kunst und Wissenschaft unserer Zeit. Leipzig (Wolbrecht) 1833, S. 132 f., 140-146. In: Polheim: *ibid.*, S. 65.
- (35) 「ノヴェレの興味はそれに対してひとつの個別的は事実としての、個別的な状況に集中しなければならぬ。」 Reinbeck, Georg: *Einige Worte über die Theorie der Novelle*. In; C. R., *Situationen*. Ein *Novellenkranz*. Stuttgart (Beck und Fränkel) 1841, S. XIII bis XXIII. In: Polheim.: *ibid.*, S. 36
- (36) Tieck: *Schriften*. XI. Bd. S. LXXXVI.
- (37) Schlegel, A. W.: In: Polheim: *ibid.*, S. 18.
- (38) Tieck: *Schriften*. XI. Bd. S. LXXXIX.
- (39) 「人間の神的なるものに対する関係は点であった。」
Köpke, Rudolf: *Ludwig Tieck. Erinnerungen aus dem Leben des Dichters nach dessen mündlichen und schriftlichen Mittheilungen*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1970. II. Theil. S. 50.
- (40) Köpke, R: *ibid.*, S. 52.
- (41) Tieck: *Kr. Schriften*. II. Bd. S. 381.
- (42) Tieck: *Schriften*. XI. Bd. S. LXXXVI.
- (43) Tieck: *Kr. Schriften*. II. Bd. S. 378.
- (44) Heinichen, Jürgen: *ibid.*, S. 39.
- (45) Tieck: *Kr. Schriften*. III. Bd. S. 94.
- (46) 会話によってノヴェレの中に挿入された「省察」は洗練された、或は衛学的なものであったが、それ自体下層階級の読者層に対する切り捨てを意味し、ピーダーマイアー・ノヴェレの重要なメルクマールであった、「娯楽」と「教養」の提供を意味するものであったと言えよう。又、作家の側から言えば、

- これは、通俗文学に対する高踏的地位を示すものであろう。Vgl. Sengle, Friedrich: Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution 1815-1848. Stuttgart (Metzler) 1972. II. Bd. S. 835.
- (47) ハイニヒェンはこの点にティエックのジャンル規定の出発点を見ている。Vgl. Heinichen, J: *ibid.*, S. 37.
- (48) Vgl. Polheim, K. K.: *Novellentheorie und Novellenforschung* (1945-1963) Referate aus der DVjs. Stg. 1965. S. 306 f.
- (49) Nüsslein, Franz Anton: *Lehrbuch der Kunstwissenschaft*. Landshut (Krüll) 1819, S. 281. In: Polheim: *ibid.*, S. 39.
- (50) Weber, Wilhelm Ernst: *Vorlesungen zur Aesthetik, vornehmlich in Bezug auf Göthe und Schiller*. Hannover (Hahn) 1831, S. 252 f. In: Polheim: *ibid.*, S. 84.
- (51) Feuchtersleben, E. Fhr. v.: In: Polheim.: *ibid.*, S. 110.
- (52) Reinbeck, G.: In: Polheim.: *ibid.*, S. 37.
- (53) Tieck: *Schriften*. XI. Bd. S. LXXXIV.
- (54) Sengle, Friedrich: *Der Romanbegriff in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*. In: Derselbe: *Arbeiten zur deutschen Literatur 1750-1850*. *ibid.*, S. 190.
- (55) Schröder, R.: *ibid.*, S. 212.
- (56) *ibid.*
- (57) Steinecke, Hartmut: *Romantheorie und Romankritik in Deutschland*. Stuttgart (Metzler) 1975. I. Bd. S. 51.
- (58) 「しかし、イギリス人は既にずっと前から彼らの全てのロマーンをノヴェレと呼んでいる。」 Tieck: *Schriften* XI. Bd. S. LXXXIV. 及び Köpke, R.: *ibid.*, S. 234.
- (59) Steinecke, H.: *ibid.*
- (60) *ibid.*, S. 306 f.
- (61) *ibid.*
- (62) 「この瞬間以後、世界と人間、愛と憧憬、肉体と精神が私にはどんなに奇妙にまた奇異に思われたか…」 Tieck: *Schriften*. XXVIII. Bd. S. 110.
- (63) *ibid.*, S. 445.
- (64) Vgl. *Letters of L. Tieck, Hitherto Unpublished 1792-1853*, coll. and ed. by E. H. Zeydel, P. Matenko, K. H. Fife, New York (Kraus) 1973. S. 189.
- (65) Köpke: *ibid.*, S. 175.